

# 「被告人」

作・ひきだ愛音

戯曲本舗コラボ企画  
『公開ドラマリーディング 3X||h4乗×y』参加作品

(ピンスポ。男が一人、俯き、イスに座っている。)

被告人←

殺菌処理された白い作業着、白い長靴、白いマスクに白いヘルメットを被ったら、手袋をはめて入念に洗う。自動ドアを抜けて、狭い無菌室に閉じこめられたら、しばらく全身に送風をあびる。埃や髪の毛を落とし、自動ドアを抜け、作業場に着いたと思ったら、道具を入念に点検。そうしてやっと、最初の牛を待つ。今日も異常なし。

(呼ばれていることに気付き) はい？あ、すみません、判事さん。なんでしたっけ？

現状ですか、ええ、なんとなく。裁かれてるんですよ、僕は。天国行きか、地獄逝きか。

「随分落ち着いてますね」って、まあ、実感沸いてないだけですよ。夢みてるような、というか：初めてなんで。

「死ぬ直前まで何をしてたか」？

さあ：普通に仕事してたような気がするんですけど。よく覚えていません。なんで死んだんだろう？

はい。僕は屠殺場（とさつば）で働いています。

仕事は毎朝八時から始まって、一時半から二時までにはだいたい終わります。一日に牛を四三〇頭、豚は一三〇〇頭、翌日のセリに間に合うようにさばかないといけません。シメて、頭を切り落として、皮を剥ぐ。内臓を取り出して、解体、真つ二つにした状態を枝肉（えだにく）っていうんですけどね、そこまでいったら品質保証の印（いん）を押して、完了です。一頭につきかかる時間は五〇分。並行して品質検査も行います。

まさか！一人で全部やるわけにはいきませんよ。完全流れ作業です。僕の仕事は、連れてこられた牛を屠殺して、解体ラインに乗せるまで。四人体制で一頭をシメていました。チームは全部で7組。まあ単純計算するとひとチームで一日あたり6、70頭はさばいでることになりますか。

（音響から、被告人本人の音がする）

殺菌処理された白い作業着、白い長靴、白いヘルメットを被ったら手袋をはめて、入念に洗う。自動ドアを抜け、狭い無菌室に閉じこめられたら、しばらく全身に送風をあびる……。

気持ち悪いかさそういうことは別に。慣れてますから。もう3、4年はやっていますから。

・・・あの、一つ質問していいですか？僕は、地獄行きかもしれないんですか？いや「まだ決まっています」ってそりゃあわかりますけど、だって裁判にかけてるってことは、有罪になり得る根拠がある、ってことなんですよ？

・・・心当たり、無いんですけど。全然。

（何か思い当たり）まさか、毎日動物を殺す仕事だから地獄逝きだ、とかいうんじゃないですよ？もしそうならお門違いですよ。

だって、それは僕の責任ではないじゃないですか。僕ってどうか、僕たち？誰かが絶対やらなきゃいけない仕事を、たまたま僕たちがやってるっていうだけで。

しかもこれ、僕の地獄行きか天国かって話ですよね？ということは、屠畜業界全体の責任を僕一人が取らされるってことですよね？

いや、それはおかしいでしょ！

こう見えてもね、地方公務員なんですよ。国に雇われてるんです。大都市の巨大な胃袋を養うために、少ない給料で毎日毎日こき使われてる。

こんな仕事してるから悪だっというなら、そもそも僕じゃなくて、このシステムを起用した政府とか、もつと上の立場の人間でしょうよ！

・・・そうだ、俺は悪くない。真面目に仕事してただけだ。

僕より裁かれるべき人間なんでもつといるはずですよ。今の世の中見ればわかるでしょう！

たとえばコンビニやファミレス！具だの出汁だの、たとえば肉が料理に使われますよね？でもそうやって調理されたって、店で売れ残ったらその日のうちに捨てられちゃうわけじゃないですか。食べ残すやつもいるだろうし。

せつかく僕らが汗水たらして生産した食品も、半分以上がゴミと化すんです。せつかく命を分けてくれた他の生命も、資本主義の社会がサイクルするための捨て駒になるんです。無駄死にですよ。

そんなことをさせてる社会、どう思います？悪だと思っしょ？**こんな下っ端の僕なんかよりずっと！**

だいたい、僕らが毎日さばいてる牛は、多くは霜降り牛とか上等な肉、ようは僕自身は普段全く食べないような肉ばかりです。

霜降りにする理由はなんですか？生きていくために何か食べなきゃいけないからっていうなら、健康な、脂肪の少ない、かたい肉でいいじゃないですか！わざわざ人をこき使って、上等な肉を作らせる必要はなんですか？

男の背後に、黒い背景。白い文字が浮かび上がる←  
(黒子がスケッチブックを持って登場。「」ごとにページをめくる。)

「人が生きている限り、胃袋は休まない。」

「欲望はもつと休まない。」

「旨いものが食いたい。脂の乗ったA5ランクのサーロイン！」

「ロース！肩ロース！フィレ、スネ、ほほ肉！」

「ハラミ！」

「カルビ！骨付きカルビ！」

「タン塩、上ねぎタン塩！ホルモン！」

「焼〱き〱肉〱焼〱き〱肉〱」

…そうやって贅沢してる連中だって、罪じゃないんですか？なんでそんなやつらの罪を、僕一人が肩代わりしなきゃいけないんですか。

ふたたび男の背後に、文字←

「ママ、今夜はしゃぶしゃぶ食べたあい！」

「新発売！ダブルベーコンチーズバーガー！」

「今だけ大盛り300円！牛丼！牛丼牛丼牛丼！」

そのくせ、そんな連中の中で育った、社会を知らない低能なガキどもが僕たちを差別したりしている。

聞いたことないですか？そういう話。まあ歴史的な問題とともありますけどね、あるんですよ、未だに。

「才前ラハ毎日牛ヤ豚ヲ殺シテイルノダロウ。ソナナ非人道的ナコトガ毎日デキルノハ、才前タチガ本来人間トシテ生キル価値ノナイ、穢多野郎ダカラダ」

いまのは昨日うちの事務所に届いた手紙です。こんな口の口ですよ。屠畜業者だけでしょね、同業者の中でも悪者扱いされるのは。畑でニンジン引き抜こうが海でマグロ釣ろうが、誰も「非人道的だ」なんて言わないんだから。

・・・でもね、判事さん。ここだけの話ですけど、そういう手紙ってまあ手書きなり活字なりありますけど、手書きのヤツ見たことあります？…笑えますよ。字は汚いわ、誤字脱字は多いわ。内容も稚拙としか言いようが無い。正直、こいつの脳ミソ中学生レベルだなとか思いますよ。知性のかけらも感じられない。そのくせ動物愛護がどうのこうのとわかったようなことを言ってるんだから、本当おかしい。

だいたいこの手紙もね、「殺すのが非人道」って言ってますけど、手紙書いてるんだから書いた本人だって生きてるわけですよ。じゃ、そいつは生きるために普段何を食ってるんですか？

種類の問題じゃないんですよ、僕が言ってるのは。野菜なら許されるとかそういう話じゃない。野菜も魚も肉も、もとは全部生きてるわけじゃないですか。ほとんどの動物が、生きるためには食べなければいけなくて、じゃあ何を食べるかって言ったらやっぱり他の生き物を殺して食べなきゃいけないわけでしょう。生きるために他の命を奪うことが罪だっていうなら、じゃあお前は何か食うなって話になっちゃうでしょう。

・・・そんなこともわからないようなガキどもに、穢多野郎エタヤロウつて、お前らが俺の何を知ってる。見下される筋合いなんか無いんだよ！

たまたまだったんです、この仕事についたのは。別にね、最初から屠畜がしたかったわけじゃないんです。でも、それなりに大変だったんですよ。

職人の技術習得するために。

・・・そう、俺は職人なんだ。ナイフ一本、腕一筋で生きてる。自分に誇

りをもって・・・それなりに一生懸命生きてきたんだ。  
ねえ、教えてくださいよ、どうして見下されなきゃいけないんですか。  
俺の何が悪いって言うんだ。

(音響から、被告人本人の声がする)

殺菌処理された白い作業着、白い長靴、白いヘルメットを被ったら手袋をはめて、入念に洗う。

・・・俺はね、判事さん。この世に未練なんかありませんよ。まあ、お袋のことはちよつと心配ですけど。弟がなんとかしてくるだろうし。またひとつ迷惑かけることにはなりませんけど、これが最期の頼みだっていうなら・・・ねえ？

あいつもきつとせいせいしてるでしょうね。散々自分に迷惑かけた兄貴が死んで。

弟はまだ高校生です。アイツね、俺のことで学校で言われるらしいんですよ。「お前の兄ちゃんブタ殺し」って。「そんな連中相手にするな。考え方のものが下等だ」って言ってやっただんですけどね。

ちなみにどうでもいいんですけど、その頃から俺は牛の担当で、豚をさばいたことはないんです。なぜなんですかね、「牛殺し」っていうとなんか強そうに聞こえるのに、「ブタ殺し」っていうと見下した感じに聞こえるのは・・・。

それから実家にもいたずら電話とかひどくなつたんでね。弟とお袋は引越したんです。俺はこっちの就職が決まったから残りしましたけど。

ええ。今は一人で住んでます。

仕事のせいで損したことなんてしょつちゆうですよ・・・結婚したい女がいたんです。でもいざ申し込むとなつたら、仕事の話もちゃんとしておかなきゃってなるでしょ？それまで「食品関係」としか言っていなかったんで。

いや、別に後ろめたかったわけじゃ！相手への配慮ですよ、配慮。何も、付き合いはじめたときから「この人毎日牛殺してるんだ」とか考えさせる必要ないでしょ？

話した直後は、彼女もわかってくれたみたいな態度でしたけどね、女つてのは薄情ですよ。それ以来、あいつは俺と寝ようとしなくなりました。だんだん家にも寄り付かなくなって。最後に会った日も・・・手をね、握ろうとしたらこんなふうに（振り払われる動きをして）・・・はつきり。それからもう一ヶ月、連絡なしです。もう完全にフラれてますよね、俺？それもこれも、やっぱこんな仕事だからしょうがないんですかね・・・。

自動ドアを抜け、狭い無菌室に閉じこめられたら、しばらく全身に送風をあびる。

・・・こそ、まただ。また同じ景色・・・。

とにかくね、判事さん。俺は現世に飽きたんです。毎日毎日、同じ景色を見て。今日も昨日も全く変わらなくて、日にちが過ぎてる実感もない。

埃や髪の毛を落とし、自動ドアを抜け、やっと作業場に着いたと思ったら道具を入念に点検。そうしてやっと、最初の牛を待つ・・・今日も異常なし。

毎日毎日、同じ景色を・・・

係留所から狭い通路を通って、また一頭やってくる。棺おけ。棺おけの入り口は閉ざされる。

・・・そう、今朝も一頭目の牛が入ってきました。いつも通り、異常なく。

身動きの取れないまま立ち尽くしている。その額に銃をあてがう。

さあ早く、さばいてくださいよ、判事さん！俺は地獄いきですか？天国いきですか？

ポント、と一押し。とたんに電流が流れて、気絶。目を見開いたまま、倒れこむ。棺おけの壁の一つが開いて、転がり落ちる。

仮に、仮に天国に行くとしたら、その次はどうなるんです？また生まれ変わるんですか？だったらどっちにしろおんなじだ。

ポント、と一押し。とたんに電流が・・・

流れた。あのととき電流は流れた。牛はこれまでと同じように、目を見開いて、倒れこんで・・・

頸動脈を切りつけ、

壁が開いて牛が転げ落ちたとき・・・右の前足がちょっと動いた？いや、気のせいだ。転がった反動にすぎない。屠蓄銃に以上はなかったはず・・・

喉から胸にかけてナイフを入れる。徐々に奥へ奥へと切り開いて、心臓に到達。

そうだ、そこまでいったとき、突然牛が立ち上がった。気絶していたはずの牛が、

太い血管を刺す。一気に噴き出す血・・・。

・・・そうだ、思い出した。牛が暴れて、俺は弾き飛ばされた。壁に頭を強く打って、

その繰り返し。いつもの光景・・・

・・・そうか、なんで死んだのか、思い出した。あのときも俺は、死んでもいいやって思ったんだ。牛が迫ってきたときは怖かったけど、体が浮いて、地面にたたきつけられるまでには、もう諦めがついていた・・・。

いつもの光景・・・

係留所っていいましてね。全国から到着した牛を、まずそこで一晚過ごして、落ち着かせるんです。

いや、俺の仕事のことです。今、全部思い出しました。

俺、最近何やっても楽しくなくて。ろくでもないことばっか考えちゃって。仕事してるときは何も考えなくて済むからいいやって、思ってたんですけど。

今思えば、仕事に八つ当たりしてたのかなって思って。

牛を殺すとき、なんだかよくわからないんですけど・・・スカツとしてたんですよね。

前日のうちに休ませた牛は、係留所から狭い通路を通過して、一頭ずつやってきます。牛は体一つしか入らない、棺おけみたいな箱に追い込まれて・・・棺おけって表現はある意味その通りかな。その入り口が閉められると、牛は身動きの取れない状態で立ち尽くしています。その額に銃をあてがう：銃って言うっても、見たことないでしょ、判事さん。でっかい判子みたいな形してるんですよ。そいつを、ポンツ、と一押しする。とたんに電流が流れて、牛は気絶します。目を見開いたままね、こう、倒れこむんです。重さが振動になって、足まで伝わってきて。

そういうとき、俺、なぜか、マスクの下で笑ってるんです。ほかの仲間に

も気付かれないように。なんていうか・・・『ざまあみろ』って。

・・・棺おけの壁の一つが開いて、牛は転がり落ちていく。そこからは四人の作業です。

二人の仲間が足を持ち上げ、さらに一人が喉にバキュームを突っ込む。胃の中のものを吸いだすためにね。あやまって胃を刺しても肉が汚れたりしないようにするんです。その間に、僕が牛をシメます。

最初に頸動脈を切りつけ、喉から胸にかけてナイフを入れる。徐々に奥へ奥へと切り開いて、心臓まで到達したら：いや、心臓は刺しません、商品ですから。その手前の太い血管を刺します。一気に血が噴き出して・・・すごい勢いなんですよ。滝みたいな。だめな人が見たら卒倒しちゃうんじゃないかな。

でも俺は、その血の滝を見てるとなんだか、ほっとするんです。なんていうか、「俺は生きてる、よかった、こんなふうにならなくて」って、心の中で思ってたんです。

流しきつたら、あとは吊るし上げて解体ラインに乗せる。床の血をすばやくシャワーで洗い流して、ナイフを熱湯につける。消毒のためにいつも88度に設定されてて、やけどしないように気をつけないといけなくて・・・これで一工程終了。間髪入れずに次の牛がやってくる。その繰り返しです。その繰り返し、でした。

・・・俺が今までさばいてきた牛も、倒れるときはこんな気持ちだったのか？倒れこむ瞬間に、この世に諦めをつけて・・・

いや、まさか！

そんなの人間の傲慢な考えだ。牛が死ぬ覚悟なんて決めるもんか！もしそうなら、あの牛も、たとえ気絶できなくなったらって暴れなかつたはずだ。

そうですね？

・・・やっぱり、みんな死にたくないんだ。

・・・判事さん。

この仕事についてすぐの頃、こういうことを考えたことがあります。こいつらは、生まれたときからちやんと使命がはっきりしてる。人間さまに食べられるためにこの世に生まれさせられて、食べられるために育てられて、太らされて、それでようやく役目を果たすためにここに来た。この世に生まれた意義を最初から与えられているこいつらは、もしかしたら牛舎で育てられた仔牛のころから、その運命を知っていたかもしれない。だとしたら、こいつらはある意味羨ましい人生だって。目的がはっきりしてるんだから、悩む必要も無い。生きてるうちに存分楽しめばいいって。

牛の人生って言葉もなんかヘンだけど。

でも俺たちなんか見てみる、人間は、自分は何のために生きてるんだって、死ぬまでずっと悩んでいかなきゃいけない。理由が見出せないまま死んでくやつだっている。

だけど、そもそも生まれてきた理由なんて、ハナから無いんだ。父親と母親の偶然が重なって生まれた、それだけだ。それは牛だって豚だって本来同じことで、生まれることに理由や意義なんてない。それが自然界にとつて当然なんだ。

そんな理由を勝手に押し付けた人間のほうが異常なんだ。偏見なんだ。

・・・なんだ。俺も、差別した連中と大して変わらないじゃないか。

じゃあ、やっぱ俺は有罪・・・？

判事さん、俺、なんだかよくもうわからなくなってきました。罰すべきなら、罰してください。地獄だろうとどこだろうと行きます。

自分にとるべき責任があるっていうなら・・・けじめはつけたいですから。

(立ち上がり)ええ。思い残すことはありません。

・・・あ、

(判事に聞き返されて) あ、いえ、強いてあるとすればって思っ。家族と・・・お袋と弟と、最後にもう一度、飯が食いたかったなって。みんなでテーブル囲んで。

最近、飯食うときなんて「いただきます」すら言っ。なかつたから。

判事さんは子供の頃、やっぱりやらされましたか？こんなふう。に手を合。わ。せて・・・「いただきます」って。

(被告人、手を合わせる。何かを祈っている)

— 了 —

この作品は、戯曲創作団体「戯曲本舗」に帰属する作品です。

「戯曲本舗」では、帰属作品に触れた方から「意見・感想を頂き、それを作品の改善・修正に役立てています。

この作品を読んだ「感想」、「意見」、「質問などありましたら、是非、左記までお寄せ下さい。

gikyoku.honpo@yahoo.co.jp(戯曲本舗アドレス)

(尚、頂いた「意見やアイデアを元に修正された作品の著作権は作者に帰属されますので」了承下さい)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。